

日蓮大聖人御書全集

うえのどのごへんじ

上野殿御返事

りゅうもんごしよ

（竜門御書）

新版
1894
ゝ
1895

うえのどのごへんじ りゅうもんごしよ

上野殿御返事（竜門御書）

こうあん ねん

弘安2年（'79）

がつ にち

11月6日

さい

58歳

なんじようときみつ

南条時光

しんじよう

うえのどの

熱原

こと

にちれん

進上 上野殿 あつわらのものの事

日蓮

とうど

りゅうもん

もう

滝

高

じゅうじよう

みず

くだ

唐土に竜門と申すたきあり。たかきこと十丈、水の下

強兵

矢射落

速

滝

ることがつぴようがやをいおとすよりもはやし。このたき

多

鮒集

登

もう

鮒

もう

におおくのふなあつまりてのぼらんと申す。ふなと申す

魚登

竜

そうろう

ひやく

ひと

せん

いおののぼりぬれば、りゅうとなり候。百に一つ、千に

ひと

まん

ひと

じゅうねんにじゅうねん

ひと

登

一つ、万に一つ、十年二十年に一つものぼることなし。あ

るいははやきせにかえり、あるいはわし・たか・とび・

梟

食

じゅつちよう

滝

そう

ふくろうにくらわれ、あるいは十丁のたきの左右に

すなどりびと

連

居

網

汲

漁人どもつらなりいて、あるいはあみをかけ、あるいはく

取

射

取

者

魚

竜

みとり、あるいはいてとるものもあり。いおのりゆうとな

ること、かくのごとし。

にほんこく

ぶし

なか

げんぺいにけ

もう

おう

もんまも

いぬ

日本国の武士の中に源平二家と申して、王の門守りの犬

にひきそうろう

にけ

おう

まも

山

人

二疋候。二家ともに王を守りたてまつること、やまがつか

はちがつじゅうごや

峰

出

愛

八月十五夜のみねよりいずるをあいするがごとし。

殿

上

男

女

遊

見

つき

ほし

てんじょうのなんによのあそぶをみては、月と星との

光 合 き うえ 猿 愛
ひかりをあわせたるを木の上にてさるのあいするがごとし。

み
かかる身にてはあれども、「いかんがして、我らてんじよう

交 願
のまじわりをなさん」とねがいしほどに、平氏の中に貞盛と

もう もの まさかど う
申せし者、将門を打ってありしかども、昇でんをゆるされ

こ まさもり 叶
ず。その子・正盛またかなわず。その子・忠盛が時、始め

しよう 殿 のち きよもり しげもりとう 殿 上
て昇でんをゆるさる。その後、清盛・重盛等、てんじよう

遊 つき 産 ひ 懷 身
にあそぶのみならず、月をうみ、日をいだくみとなりいき。

ほとけ 成 道 劣 魚 りゆうもん 登
仏になるみち、これにおとるべからず。いおの竜門をのぼ

じげ もの 殿 上 参
り、地下の者のてんじようへまいるがごとし。

しんじ もう

ひと

ほとけ

成

ろくじつこう

あいだぼさつ

身子と申せし人は、仏にならんとて六十劫が間菩薩の

ぎよう 満

堪

にじよう

どう

い

行をみてしかども、こらえかねて二乗の道に入りనికి。

だいっうけちえん

もの

さんぜんじんてんごう

くおんげしゆ

ひと

ごひやくじんてんごう

大通結縁の者は三千塵点劫、久遠下種の人の五百塵点劫、

しようじ

沈

ほけきよう

ぎよう

だいろうくてん

生死にしずみし。これらは法華經を行ぜしほどに、第六天

まおう

こくしゆとう

み

い

煩

の魔王、国主等の身に入つて、ところわずらわせしかば、

退

捨

こう

ろくどう

回

たいしてすてしゆえに、そこばくの劫に六道にはめぐりし

彼

ひと

うえ

見

いま

われ

身

ぞかし。かれは人の上とこそみしかども、今は我らがみに

かかれり。

ねが

わ

でしとう

だいがん

起

こぞ

おとし

願わくは、我が弟子等、大願をおこせ。去年・去々年の

疫 病 し ひとびと 数 い どうじ もうこ

やくびように死にし人々のかずにも入らず、また当時、蒙古

責 免 見 し いちじよう

のせめにまぬかるべしともみえず。とにかくに死は一定な

とき 歎 当時 同 仮

り。その時のなげきはとうじのごとし。おなじくは、かりに

ほけきよう いのち 捨 露 たいかい

も法華經のゆえに命をすてよ。つゆを大海にあつらえ、

塵 だいち 埋 思 ほけきよう だいさん い ねが

ちりを大地にうずむとおもえ。法華經の第三に云わく「願わ

くどく いっさい およ われ

くはこの功德をもつて、あまねく一切に及ぼし、我らと

しゅじよう みなとも ぶつどう じよう うんぬん きようきようきんげん

衆生と、皆共に仏道を成ぜん」云々。恐々謹言。

じゅういちがつむいか にちれん かおう

十一月六日 日蓮 花押

うえのけんじんどのごへんじ

上野賢人殿御返事

これは、あつ^熱わ^原らのことのあり^有がた^難さに申^{もう}す御返事^{ごへんじ}な

り。